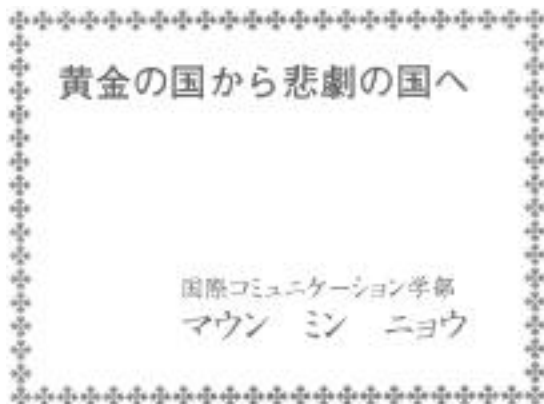


ばった表情を、私は忘れることができない。中国と台湾が本当に「家族」であるとしたら、中国の乱暴な行動は「家庭崩壊」をまぬがれない。さらに言えば、「家庭内暴力」は、「家族」の不和のみならず、「社会」にも悪影響を及ぼすことがしばしばあるものである。むしろこのことのほうがより一層深刻な問題ではないだろうか。東アジアの真のトラブルメーカーは誰なのか、敢えて大きな声で叫ぶ者はいないが、物事の本質は見失ってはならないのではないだろうか。



ミャンマー連邦同（旧ビルマ）は大国の中国とインドとの間にある。人口は日本の4割くらいで、面積は日本の1.8倍の大きさである。多民族国家でビルマ族は全体の7割くらいをしめている。宗教は9割の国民が小乗仏教を信仰している。現政権は軍政であるが、ASEANのメンバーにもなっている。

1962年から軍政の下で閉鎖的国家となり、世界からは知られざる国となった。この政権と政治体制のために、発展から遠ざかったと体験から理解できる。政治参加することは軍の政党にだけで許されているので、国民の政治感覚は狭くなる。それでわたしは海外へ出ることを決心した。

来日して8年目、1989年に祖国の国名はビルマからミャンマーに変わった。新国名になり11年目になった。長期間海外に住んでみたら、人間は動物の仲間とは違うことがわかる。動物のできることは限られている。人間にはある時代や場所できないことが違う時代と場所であればできるよう

になる。私もミャンマーでできないと思っていたことが日本でできるようになり、海外から祖国をよく見ると、ミャンマーで見えなかったことやミャンマーの実像が見えるようになり、分からないことがわかってくる。不思議である。

ミャンマーにいる間、勉強は出来ないと思ったけれども、来日して一生懸命勉強してみたら変わってきた。1988年ビルマで民主化運動が起こって来たとき、ミャンマーの政治と社会構造をもっと知りたくなり、理系から文系へ転身した。祖国の問題をもっと探ってみようと思決心した。

山口洋一・駐ミャンマー元大使が、「軍事政権は国名を本来のミャンマーに戻し、安定的な政治制度の確立と市場経済導入による、自由で開放的な体制にもとづく、経済近代化を目指して国造りの努力をしており、着実に成果をあげてきている。今やこの国はネ・ウィン時代の停滞から脱皮して、近代に国家へと躍進する途上にある。」と書いている。しかし、私が調べてみたところ、ミャンマーの政治的、歴史の実像は下記ようになる。

2-3世紀のビルマではピューの時代があった。このピュー王国を「平和の国」と中国の旅人たちは書いた。11世紀にパガン王朝になって、周辺の国々は統一され、ミャンマーの国になった。文語でミャンマー、口語ではバマーである。しかし、16世紀には欧州の冒険家たち、特にポルトガル人が来てから国名は西洋の国で「ビルマ」として知られるようになった。19世紀に英国と3回の戦争があつて、ビルマはそれ以降英国の植民地になった。英国はミャンマー語の口語に近い発音であるバマーと言う国名を便った。世界にバマーは「黄金の国」、すなわち、「陣の国」、小乗仏教の国と言われるようになった。

伝統の君主制の時代にも、一般の国民には自由に売買ができる土地の所有権があつた。「血生臭い専制主義」と西洋の歴史学者たちは言っているが、実際は仏教思想にもとづく人間的な政治体制も見られた。英国の下では「米の国」となった。どの時代でも国民は物質面と精神面での豊かさが多少あつた。

第2次大戦中、ミャンマーは日本の占領地になり、国民は初めて苦い経験をした。現軍政の政治的なルーツが初めて出来た時期でもある。戦後1948年にイギリスの支配下から独立。冷戦の影響でミャンマーにも内戦があった。しかし議会制度と自由経済の陣営が勝利し、アジアで最も豊かな国の一つとして急成長した。

1962年にネウィン將軍率いる軍隊がクーデターを起こし、彼の軍政、そしてビルマ式社会主義の思想での一党独裁政権となり、現在も軍政が続いている。

さて、山口氏は現軍政の国家平和発展評議会（SPDC）において、「軍事政権 = 悪王」ではないことを強調したが、40年間の独裁政治のせいでミャンマーは世界で一番貧しい国となった。国民は囚人のように苦難にたたされている。今は様々な問題を抱えている。すなわち、麻薬、人権、民主化、教育である。そして「悲劇のランド」と言われるようになった。

なぜこのような問題ができてしまったのか。原因は何か。

現軍政は、イギリスの植民地主義、すなわちビルマで行なわれていた分割統治制度の結果だと言う。その政策はビルマ族が住む平地には近代的行政を、少数民族の山間部には伝統的王政を行なった。独立後、民族分離主義が広がり、国家は分断の危機に直面しているので、軍政が必要と強調している。そして、未来の憲法に、民主国会の議席に軍人が4割関与すべきと要求している。

ミャンマーの政治史を調べて見ると、君主制の時代の行政は、山間地、平地と辺境地がそれぞれ異なった。分割統治政策と似ている。もちろん、ミャンマーの問題点の一つとして、植民地主義の影響もある。特に平等に教育を受けられる、伝統的な寺院を中心とした教育制度を崩壊させて、近代教育を進めて行ったけれど、都市部中心的教育だけを行った欠点も大きいと思う。しかし、「すべてを悪として断罪」することは間違いである。実際は軍政すなわちネウィン政治を改革できないことがキーワードとなってくる。これを理解しな

かったならば、軍政を認めてしまうことになる。

多民族国家形成のため不正な路線に陥っていることを、下記にある図1のSPDC政治思想は明確に示している。悪循環に陥ってしまっていることがよく分かる。彼らが強調しているのは、ビルマ族と少数民族との統一は植民地主義者の下で崩壊されたということである。それを育成するために、下記の図にある肥土のような「よい意向」と「正直十誠心誠意」が必要である。この土地に愛国心が出てくるとき、国家という樹木が育つようになる。木の根が「連邦性の心」で、幹が「ミャンマー連邦国」で、そして枝は国民の居住地で州と管区になる。これは彼らの論理である。この論評では狭いナショナリズムの壁を超えられないと思う。実際、彼らの政治は反植民地主義、反欧米、そして独裁国家の支持者だけにとどまってしまう。

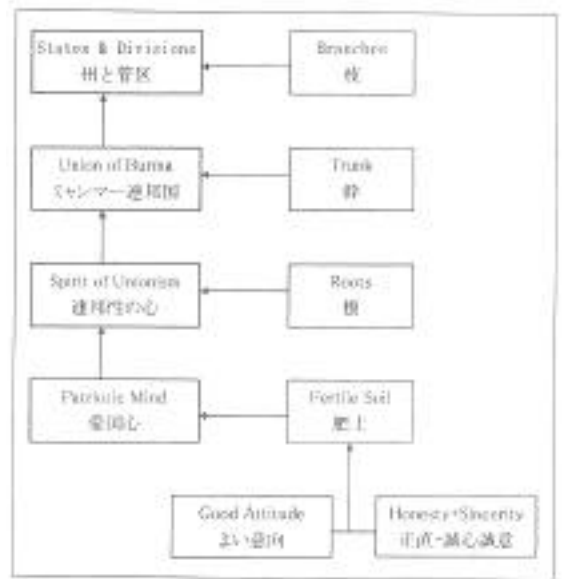


図1 国平和発展評議会の政治思想1

もう一つのキーワードはネウィン政治の中央集権制である。現軍政（SPDC）とネウィン政権の政治本質はあまり変わっていないことが下記の図で明らかである。図2と図3を比較すると、BSPP（ネウインの政党）とSPDC（現軍政の評議会）の組織名だけが違う。経済では自由経済と言っている。実際は民間セクターは発展して来たけれど、軍情報局の管理があって、本来の自由経済には

なっていない。彼らの政治をわかってくればくるほど、軍政はなぜ民主化、人権、自由に抵抗するかが理解できる。結局、ミャンマーの政治発展と経済発展をさせるためには、最初の出発点は軍情報局を中心した政治構造を崩壊させること、三権分立を確立することである。マスコミを自由にさせ、また軍人が政治に関与できないように軍隊を改革することである。そして、連邦国家の形成のために地方分権を行うことである。これらをしていない限り、ミャンマーが問題の悪循環から脱度することは出来ないだろう。

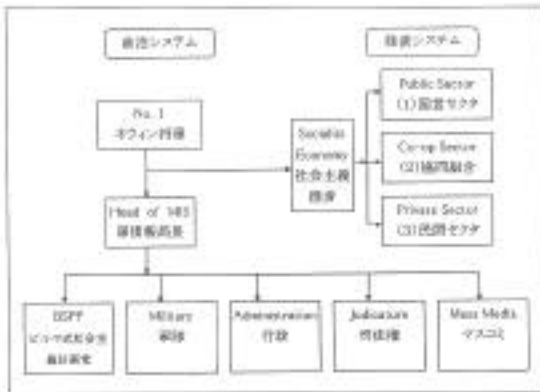


図2 ネウインの政治（1962年1988年まで）

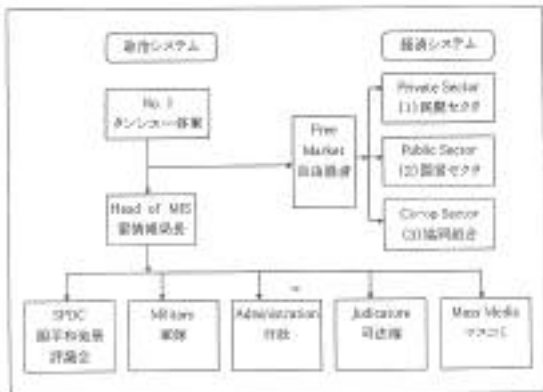


図3 現軍政（SPDC）の政治（1988年—現在まで）

1 New Light of Myanmar (ビルマ語の新聞)  
The Spirit of Unionism, P5, 7 April 2000 to 11  
February 2000 (series, 36 articles)



This year I went to visit Guizhou (貴州) during Golden Week. There is a direct flight from Nagoya Komaki to Chongqing (重慶), and from there I took a night train down to Guiyang (貴陽). There were three things that I wanted to find out more about. The first was to learn about beekeeping (養蜂) in Guizhou. Secondly, I am interested in indigo dyeing (藍染め) and Guizhou is well known for this. And thirdly, I wanted to learn more about the Long March (長征?).



I had a friend in Guiyang who I had met at a beekeeping conference a few years ago, and he was very welcoming. When I first arrived we went by car to visit the zoo in Guiyang. He had worked in this zoo for ten years looking after the camels and monkeys during the Cultural Revolution. He told me that his father had died in prison in 1971. The Cultural Revolution in his opinion had been a terrible mistake. Next we